

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 嶋田 久美

【所属】 (助成決定時) 京都大学大学院 人間・環境学研究科

【研究題目】 現代の精神科療法における表現行為の役割と機能
—フランスの「制度論的精神療法」の実践と思想から—

【研究の目的】 (400字程度)

本研究の目的は、精神療法における表現行為の役割と機能を、フランスの「制度精神療法 (psychothérapie institutionnelle¹)」(以下 PI と略記) を手がかりとして検討することである。PI は、第二次世界大戦中からその直後にかけてのレジスタンス的な風土のなかから生まれた精神療法であり、パリのラ・ポルド病院を中心に各地で実践されている。PI の主な特徴は、治療環境において人々の間に形成される規則、習慣、場の雰囲気などの諸要素を「制度 (institution)」として捉え、それら制度の分析 (analyse d'institution/analyse institutionnelle) を治療活動の要としている点にある。ゆえに、クライアント (患者) 自身が行う、語る・歌う・奏でる・描く・踊るなどの表現活動が取り入れられる際にも制度分析の視点が重要となる。本研究は、このような PI の活動のあり方の成り立ちを明らかにすることを通して、今日の精神療法における表現行為の役割や機能を制度分析との関連から考察するものである。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

本研究では、上記の目的を達成するため、主に以下の2つの観点からの考察および調査を試みた。

(1) PI の活動の仕組みの思想的背景に関する考察

本研究では、PI に関わる主要人物のうち、ラ・ポルド病院の院長ジャン・ウリ (1924-) と精神分析家フェリックス・ガタリ (1930-1992) の著作を中心に読解し、PI の活動の仕組みの思想的背景を探った。PI では、患者、医師、スタッフ間の関係を膠着させないために、人々の集団性と活動の複数性を生かした独自の仕組みが作られている。その仕組みに関わる、「横断性」、「分裂分析」、「機械状無意識」、「集団的主観性」、「疎外」などの諸概念が醸成されるに至った背景や意図について論点の整理を進めた。次に、PI における表現活動の機能を明らかにするため、音楽や絵画などの芸術や創造性に関する論考や記述にも着目し、臨床的観点からの再解釈に取り組んだ。

(2) 制度的実践が行われている施設の訪問、および活動の実地調査

近年、日本の文脈での PI の意義や有用性について検討されている (多賀茂・三脇康生編『医療環境を変える』京都大学学術出版会、2008年)。報告者は、PI の考え方にいち早く注目し実践してきた先駆的な施設の一つである国内 X 病院において、1ヶ月に渡る研修の機会を得た。当該病院では、現地の文化や風土に根ざした形での芸術療法や園芸療法を取り入れた多彩な活動が行われている。その基盤には PI と通底する考え方がある。たとえば、患者の病状も表現として捉え、その表現を閉じられたものから開かれたものへと変化させるために、治療の環境を整えるプロセスが重視されており、その際、表現療法が大きな機能を果た

¹ この術語の既訳には、他にも「制度論的精神療法」や「制度を使った精神療法」などがある。報告者は、助成申請時には前者を用いていたが、その後、制度研究会にて訳語を検討した結果を踏まえ、本報告では「制度精神療法」を用いることとした。

すことになる。また、資格上の職種の区別によって役割を固定してしまうのではなく、様々な職種のスタッフが協働し、横断的に活動に参画しやすい環境作りが行われている。研修では、院内の作業療法センター、併設の入所授産施設およびデイケアセンターにおける各種活動プログラムの参与観察、病棟の視察、院内研究会の聴講などを通して、精神医療の制度的実践の把握に努めた。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究は現在も進行中であるため、これまでの考察と今後の課題を記すことで本報告のまとめとしたい。

まず、本研究を通して浮かび上がってきたのは、媒介としての表現行為の機能、すなわち、表現活動が人々と空間のあいだに有機的な繋がりを生む作用である。このことは、報告者自身がX病院での実地研修を通して直に体感したことでもある。たとえば、正規の活動プログラム自体もさることながら、病棟でのスタッフによる声がけや身振り、活動の様子を紹介のための画像を用いたプレゼンテーション、何気なく配置されている活動の写真や絵、植物などは、空間と人々を緩やかにつないだり、あるいはすでにできあがっている関係性のなかにある種の風穴や隙間を生み出すきっかけとなりうる。媒介としての表現行為の機能とは、そういう仕掛けのスイッチが発動する可能性を担保していくことであるとも考えられる。その意味において、精神医療は場の動的な潜勢力に支えられた時間の営みであると言える。

一方、見えてきた課題は、制度分析の持続可能性である。制度分析とは、各人がその場への関与の当事者性（立ち位置）を問い直されるということでもある。当事者性の次元や度合いは各人によって異なる。ゆえに、ある分析と別の分析が出会うことでかえって軋轢が生まれることもありうる。軋轢への対応の仕方は現場によって異なるであろうが、いずれにせよ、制度分析が継続して行われるためには、分析行為に伴う労苦を分散させる何らかの工夫が必要であろう。その意味で、PIで重視されている活動の複数性は、むしろ制度分析の持続可能性を担保する必要条件であると考えられる。複数性は、単なる選択肢の豊富さを意味するだけでなく、人々のあいだに循環を生み、出会いの複層性や空間的・時間的差異を生成するからである。その活動の複数性を支えるのが多職種多技能の連携を生かした横断性の創出であると考えられる。

また、制度分析の如何は人的資源や組織規模、活動期間にも依るところが大きいと思われる。たとえば、病院の場合は、規模や資源、継続性という点で、ある活動が別の活動を開いていく準備の役割をも担う環境を作っていく手立てを得やすい。しかし、地域での単発的な活動や、近年のコミュニティ・アートのようにプロジェクト型の活動については、場に関与する手続きの方法、すなわち集団性への制度分析的介入の方法論が異なるだろう。

今後の課題としては、国内外の制度的実践の比較検討をさらに進め、制度的介入の方法論について検討していく。報告者の考えでは、制度分析に時間という観点をいかに取り込むかがひとつの鍵となるのではないかと思われる。この点に関しては、とくにガタリが示唆している感性的－倫理的次元も念頭におきながら考察を進めたい。また、制度分析を取り入れている教育学の実践、近年イギリスと北欧を中心に展開されているコミュニティ音楽療法、当事者研究、ケアの共同体論など、関連領域の活動や言説も適宜参照しながら、PIの応用可能性についてより多角的に考察していく予定である。